現代京都画壇による

源氏物語絵展

時代を超える王朝浪漫

Genji Monogatari

平成17年
期日 3/12(土)～6/12(日)

前期：3/12(土)～4/21(木)
第一帖から第二十七帖
後期：4/23(土)～6/12(日)
第二十八帖から第五十四帖

[第一帖／桐壺] 水田 慶泉
[第二帖／帚木] 石川 義
[第三帖／空蝉] 広田 多津
[第四帖／夕顔] 磯田 又一郎
[第五帖／若紫] 小松 均
[第六帖／末摘花] 曲子 光男
[第七帖／紅葉賀] 小川 立夫
[第八帖／花宴] 木村 廣吉
[第九帖／葵] 三輪 良平
[第十帖／賢木] 岡村 倫行
[第十一帖／花散里] 黒光 茂樹
[第十二帖／須磨] 下村 良之介
[第十三帖／明石] 池田 道夫
[第十四帖／澪標] 前田 直衛
[第十五帖／蓬生] 三輪 晃久
[第十六帖／関屋] 鹿見 喜陌
[第十七帖／絵合] 堀 泰明
[第十八帖／松風] 澤野 文臣
[第十九帖／薄雲] 川島 浩
[第二十帖／朝顔] 大野 藤三郎
[第二十一帖／乙女] 来野 あぢさ
[第二十二帖／玉鬘] 丹羽 貴子
[第二十三帖／初音] 後藤 順一
[第二十四帖／胡蝶] 稲田 和正
[第二十五帖／螢] 上村 松篁
[第二十六帖／常夏] 正井 和行
[第二十七帖／篝火] 上村 淳之
[第二十八帖／野分] 大塚 明
[第二十九帖／行幸] 下保 昭
[第三十帖／藤袴] 野々内 良樹
[第三十一帖／真木柱] 村田 茂樹
[第三十二帖／梅枝] 岡崎 忠雄
[第三十三帖／藤裏葉] 林 潤一
[第三十四帖／若菜(上)] 岩澤 重夫
[第三十五帖／若菜(下)] 入江 酉一郎
[第三十六帖／柏木] 坂口 麻沙子
[第三十七帖／横笛] 松本 文子
[第三十八帖／鈴虫] 浜田 昇児
[第三十九帖／夕霧] 福本 達雄
[第四十帖／御法] 山岸 純
[第四十一帖／幻] 堂本 元次
[第四十二帖／匂宮] 川島 睦郎
[第四十三帖／紅梅] 土手 朋英
[第四十四帖／竹河] 山本 知克
[第四十五帖／橋姫] 箱崎 睦昌
[第四十六帖／椎本] 塩見 仁朗
[第四十七帖／總角] 北野 治男
[第四十八帖／早蕨] 岩倉 寿
[第四十九帖／宿木] 佐々木 弘
[第五十帖／東屋] 山崎 隆夫
[第五十一帖／浮舟] 秋野 不矩
[第五十二帖／蜻蛉] 竹内 浩一
[第五十三帖／手習] 中路 融人
[第五十四帖／夢浮橋] 大野 俶嵩

第八帖「花宴」 木村廣吉

狭山市立博物館

主催：狭山市立博物館 協力：有限会社 松榮堂

〒350-1324 埼玉県狭山市稲荷山1-23-1（狭山稲荷山公園内）
電話：04-2955-3804 FAX：04-2955-3811
http://www.city.sayama.saitama.jp/museum.htm

2100

現代京都画壇による源氏物語絵展

開催にあたって

『源氏物語』は、平安時代の中頃、紫式部によって書かれた物語です。主人公　光源氏の一生と彼の一族の物語は、現代では世界中の言語に翻訳され、人々に愛され読まれ続ける日本の誇る世界文学となっています。

また『源氏物語』は、古より絵画化され、国宝「源氏物語絵巻」をはじめとして各時代の様々な画家が絵筆を奮い、視覚化してきました。

今回狭山市立博物館の春期企画展として展示いたします現代の源氏物語絵は、『源氏物語』54帖の物語をテーマに、京都画壇の54人の日本画家が描いた個性的な現代源氏物語絵の作品群です。

当館は、昨年より「和様」の企画にテーマを絞込み、日本の文化の素晴らしさと奥深さをご紹介しております。春期企画展では、桜から若葉へと、季節の鮮やかな移ろいにあわせ、狭山稲荷山公園の自然を借景として、情緒あふれる王朝文学の世界へ皆さまをおさそい致します。

今まで「展示品の音を聴く」展示や「触って楽しむ」展示など、人の五感で楽しめるものを企画してきましたが、今回は『源氏物語』の重要なテーマであり、また、古くから茶道においても大切にされてきた「香の文化」もとらえ、その儚(はかな)い香りの世界もご紹介したいと思います。

博物館の展示は「見るだけ」の一方向のものではないということを体験していただき、絵画との対話、ひいては日本文化との対話をゆったりとお楽しみ下さい。

最後になりましたが、本展開催にあたり、貴重な資料を快くご出品賜りました松榮堂をはじめ関係各位に厚く感謝とお礼を申し上げます。

平成17年3月　　狭山市立博物館

『源氏物語』朗読会

期日　4/3(日)・4/9(土)・4/16(土)・4/24(日)・5/8(日)・5/22(日)

午後2時～2時30分頃

茶席

期日　3/13(日)・3/27(日)・4/23(土)・5/14(土)

午前11時～午後3時頃

博物館レクチャーコンサート ～琴(きん)と月琴(げっきん)～

期日　4/10(日)

午後1時30分～3時頃

『源氏物語』についての講演会　期日　後期に開催予定

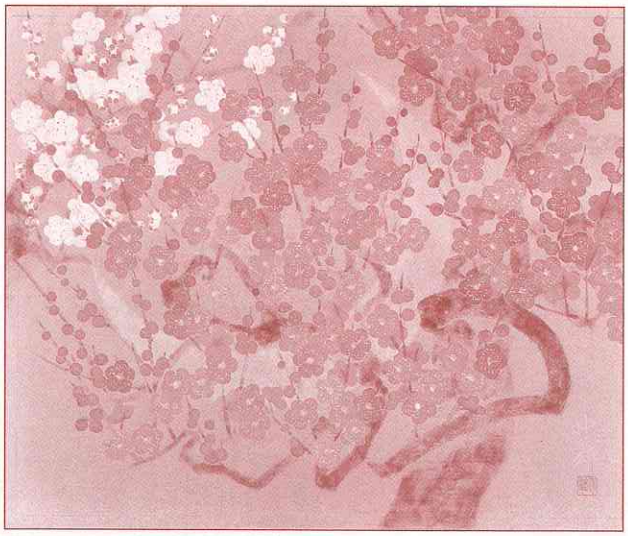
平成17年

期日　3/12(土)～6/12(日)　前期:3/12(土)～4/21(木)　後期:4/23(土)～6/12(日)

●開館時間:午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

●入 館 料:一　般150円(100円)
高・大生100円　(60円)
小・中生　50円　(30円)
(　)内は20名以上の団体料金
※土曜日・こどもの日は、小・中学生は無料

第五帖「若紫」　小松　均



第三十二帖「梅枝」　岡崎忠雄

狭山市立博物館

〒350-1324　埼玉県狭山市稲荷山1-23-1(狭山稲荷山公園内)
電話:04-2955-3804　FAX:04-2955-3811
http://www.city.sayama.saitama.jp/museum.htm

◆西武池袋線「稲荷山公園駅」より徒歩3分
◆西武新宿線「狭山市駅」西口よりバス「稲荷山公園駅行」終点徒歩3分
◆圏央道狭山日高インターより車で15分

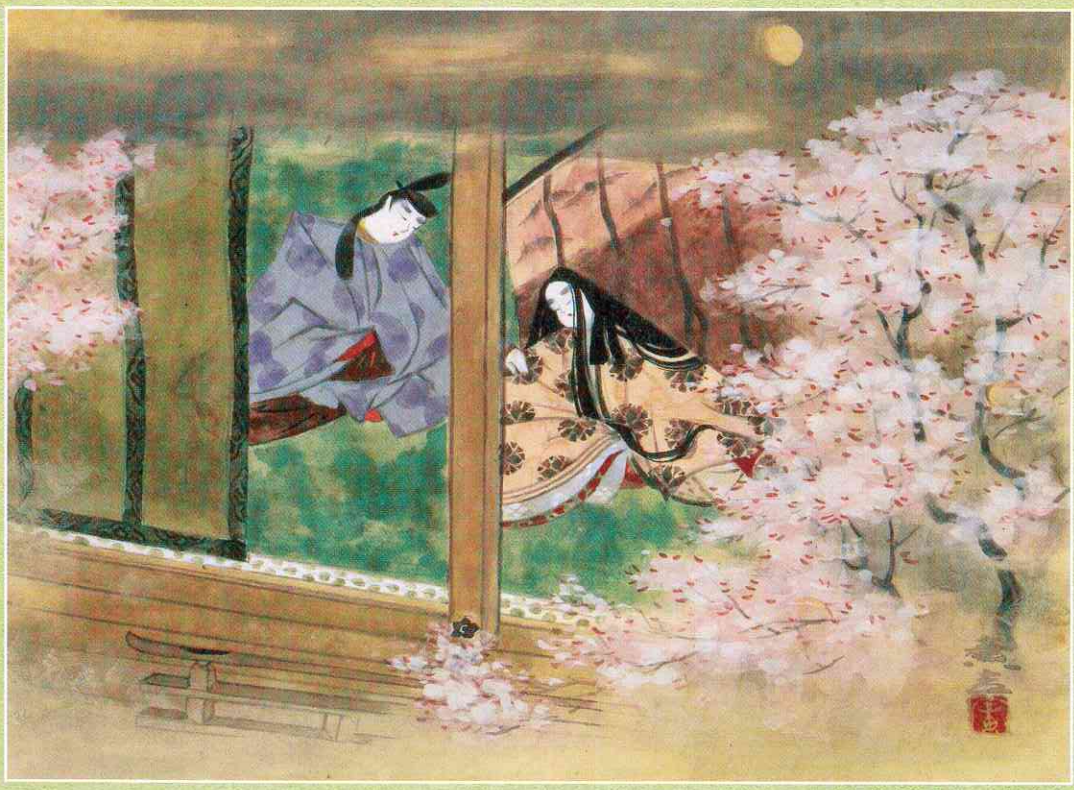
genjimonogatari

現代京都画壇による

源氏物語絵展

時代を超える王朝浪漫

期日：平成17年3月12日（土）～6月12日（日）



第八帖「花宴」　木村廣吉

主催　狭山市立博物館

協力　香老舗　松榮堂

開催にあたって

『源氏物語』は、平安時代の中頃、紫式部によって書かれた物語です。主人公 光源氏の一生と彼の一族の物語は、現代では世界中の言語に翻訳され、人々に愛され読まれ続ける日本の誇る世界文学となっています。

また『源氏物語』は、古より絵画化され、国宝「源氏物語絵巻」をはじめとして各時代の様々な画家が絵筆を奮い、視覚化してきました。

今回狭山市立博物館の春期企画展として展示いたします現代の源氏物語絵は、『源氏物語』54帖の物語をテーマに、京都画壇の54人の日本画家が描いた個性的な現代源氏物語絵の作品群です。

当館は、昨年より「和様」の企画にテーマを絞込み、日本の文化の素晴らしさと奥深さをご紹介しております。春期企画展では、桜から若葉へと、季節の鮮やかな移ろいにあわせ、狭山稲荷山公園の自然を借景として、情緒あふれる王朝文学の世界へ皆さまをおさそい致します。

今まで「展示品の音を聴く」展示や「触って楽しむ」展示など、人の五感で楽しめるものを企画してきましたが、今回は『源氏物語』の重要なテーマであり、また、古くから茶道においても大切にされてきた「香の文化」もとらえ、その儚(はかな)い香りの世界もご紹介したいと思います。

博物館の展示は「見るだけ」の一方向のものではないということを体験していただき、絵画との対話、ひいては日本文化との対話をゆったりとお楽しみ下さい。

最後になりましたが、本展開催にあたり、貴重な作品を快くご出品賜りました松榮堂をはじめ関係各位に厚く感謝とお礼を申し上げます。

平成17年３月　　狭山市立博物館

凡　例

1．本書は平成17年３月12日から６月12日までを会期とする企画展「現代京都画壇による源氏物語絵展～時代(とき)を超える王朝浪漫～」のパンフレットである。

2．図版は展示資料の一部である。展示資料は会期中に展示替えをおこなう。

前期：３月12日(土)～４月21日(木)　　第一帖から第二十七帖まで展示

後期：４月23日(土)～６月12日(日)　　第二十八帖から第五十四帖まで展示

3．この企画展は、石川友子・小渕良樹・名雲教子が担当した。

＜正誤表＞

10ページ、上から９行目の終わり部分。

正→小さく切った香木をくゆらすものではなく、香木や

誤→小さく切った香木をくゆらすもので香木や

『源氏物語』について

794年に都が平安京に移り、9世紀から10世紀にかけて「かな文字」が発達しました。同時に、そのかな文字を使った日記や物語などが女性たちの間で親しまれ、書かれるようになりました。

『源氏物語』は、そのような風潮の中で書かれた、日本が誇る世界最古の長編物語です。この作品は平安時代中期である11世紀初頭から約10年の歳月をかけて、紫式部によって書かれました。それから約1000年、『源氏物語』は文学として親しまれているだけではなく、当時の貴族たちの文化や生活を知る手がかりとしても多くの人々に読み続けられてきました。

54帖にもわたるこの壮大な物語は、一般的に大きく3部に分けて読まれています。第1部は第一帖「桐壺」から第三十三帖「藤裏葉」までで、源氏の誕生から始まり、数々の女性との恋の物語、思いがけない試練を受け、さらに栄華を極めるまでが描かれています。第2部は、源氏が40歳になる第三十四帖「若菜(上)」から第四十一帖「幻」までで、源氏の栄華の裏にある因縁や悲哀が描かれます。第3部は第四十二帖「匂宮」から第五十四帖「夢浮橋」です。はじめの3帖で源氏が亡くなった後の人々の様子が描かれ、その後は源氏の外孫である匂宮と、源氏と女三の宮の子(実は柏木との不義の子)である薫の物語になります。この最後の10帖は「宇治十帖」とも呼ばれています。

作者の紫式部は、藤原氏の中でも中流階級の出身で、本名は不明です。20代後半に結婚しましたが、約3年で夫と死別し、その後宮仕えに上がったとされています。彼女が仕えたのは一条天皇の后であり、当時政治の実権を握っていた藤原道長の娘でもある中宮・彰子です。その頃には既に『源氏物語』の作者として知られていたので、道長は娘の中宮のために彼女を仕えさせた、といわれています。しかし、この女房としての生活が『源氏物語』をより写実的で、現実的なものにしたと考えられます。また、後半の源氏はこの道長がモデルになったという説は有名です。

この現実のような世界で繰り広げられる、実在ではない貴公子の物語は、当時の貴族たちに、更に後世の人々にも文学・文化を問わず広く受け入れられました。文学では、平安時代のうちに『夜の寝覚』『狭衣物語』『浜松中納言物語』などが『源氏物語』の影響を受けて書かれています。室町期には、能の演目として『源氏物語』に由来したものがいくつも書かれており、中でも『葵上』は、現在でも傑作としてたびたび上演されています。近世には柳亭種彦の『偐紫田舎源氏』などにその影響が見られる他、国学者・本居宣長が注釈書『源氏物語 玉の小櫛』を著しました。

近代以降も影響を受けた作品が何作も書かれていますが、古典『源氏物語』を現代の言葉に訳したものが発表されるようになりました。与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、田辺聖子、瀬戸内寂聴らのものが近年では多く読まれています。また、英語、フランス語、韓国語などの外国語にも翻訳され、世界中の人々に読まれる作品となりました。

文化の面から見ると、まず思い浮かぶのは『源氏物語』に美しい絵がつけられた「源氏物語絵巻」です。現存するものは院政期に製作されたもので、国宝に指定されています。他にも、多くの画家たちが各々のインスピレーションで描いた『源氏物語』が、絵画として、あるいは屏風や調度品として数多く残されています。また、作中に描かれた音楽、遊び、生活様式や文化などは、日本の伝統的な文化として伝えられています。最近では本を読むだけではなく、漫画、映画、舞台、本文の朗読など、視覚や聴覚を使った形でも表現されています。

展示作品のご紹介

今回、平成16年度春期企画展「現代京都画壇による源氏物語絵展～時代を超える王朝浪漫～」に展示致します絵画群は、『源氏物語』54帖の各物語をテーマに、昭和から平成にかけての京都画壇で活躍されている日本画家54人の華麗な競作とも言える作品群です。

この作品群は、京都の地において「香」を専業としてきた香老舗 松榮堂が創業280余年を数え、かつ法人設立50周年を迎えるにあたり「後世に残る事業を」と志して平成３年に完成させたものです。

『源氏物語』は、王朝文化最盛期の宮廷貴族の生活を優艶に、そして克明に描き尽くしていますが、特に「香」については多くの記載があり、しかも香料の配合については、現代の技術の基本ともなっています。

「香の文化」の担い手としての立場で『源氏物語』の絵画化を進められた松榮堂の気概と、その趣旨を理解し共感した画家諸氏が『源氏物語』に打ち込み絵筆を執った結果、優美でしかも迫真に満ちた「現代の源氏絵」が完成したのです。

第三十七帖「横笛」　松本文子

第三十二帖「梅枝」　岡崎忠雄

風土と絵画は緊密な関係があることと思いますが、松榮堂と、京都の日本画家という土地に根付いた人々の情熱的な手により創られたことに、京都の地でなければ生まれ得なかった絵画群であるという感慨を抱きます。

狭山市では、毎年秋に「さやま大茶会」が行われ、そこで振る舞われる狭山産の抹茶「明松」は宇治で丁寧に挽かれています。また「明松」の銘も栄西禅師建立の京都建仁寺管長・湊素堂氏により命名されたもので、狭山市においては、茶の湯を仲介として京都との深いつながりがあります。そして、茶の席で「香」は古来より客迎えの配慮として茶室の清浄化として不可欠なものです。

こうした京都との深い文化的結びつきを思う時、桜から青葉の美しい季節に、狭山稲荷山公園の自然を借景にこの素晴らしい絵画群を皆さまにご覧頂けることを地元の博物館として光栄に思います。

今回の展覧会を「京の香りとともに」ごゆっくりとご鑑賞ください。

「現代の源氏物語絵」画家一覧

第一帖	桐壺	水田	慶泉	第二十八帖	野分	大塚	明
第二帖	帚木	石川	義	第二十九帖	行幸	下保	昭
第三帖	空蝉	広田	多津	第三十帖	藤袴	野々内	良樹
第四帖	夕顔	磯田	又一郎	第三十一帖	真木柱	村田	茂樹
第五帖	若紫	小松	均	第三十二帖	梅枝	岡崎	忠雄
第六帖	末摘花	曲子	光男	第三十三帖	藤裏葉	林	潤一
第七帖	紅葉賀	小川	立夫	第三十四帖	若菜(上)	岩澤	重夫
第八帖	花宴	木村	廣吉	第三十五帖	若菜(下)	入江	酉一郎
第九帖	葵	三輪	良平	第三十六帖	柏木	坂口	麻沙子
第十帖	賢木	岡村	倫行	第三十七帖	横笛	松本	文子
第十一帖	花散里	黒光	茂樹	第三十八帖	鈴虫	浜田	昇児
第十二帖	須磨	下村	良之介	第三十九帖	夕霧	福本	達雄
第十三帖	明石	池田	道夫	第四十帖	御法	山岸	純
第十四帖	澪標	前田	直衛	第四十一帖	幻	堂本	元次
第十五帖	蓬生	三輪	晃久	第四十二帖	匂宮	川島	睦郎
第十六帖	関屋	鹿見	喜陌	第四十三帖	紅梅	玉手	朋英
第十七帖	絵合	堀	泰明	第四十四帖	竹河	山本	知克
第十八帖	松風	澤野	文臣	第四十五帖	橋姫	箱崎	睦昌
第十九帖	薄雲	川島	浩	第四十六帖	椎本	塩見	仁朗
第二十帖	朝顔	大野	藤三郎	第四十七帖	總角	北野	治男
第二十一帖	乙女	来野	あぢさ	第四十八帖	早蕨	岩倉	寿
第二十二帖	玉鬘	丹羽	貴子	第四十九帖	宿木	佐々木	弘
第二十三帖	初音	後藤	順一	第五十帖	東屋	山崎	隆夫
第二十四帖	胡蝶	稲田	和正	第五十一帖	浮舟	秋野	不矩
第二十五帖	螢	上村	松篁	第五十二帖	蜻蛉	竹内	浩一
第二十六帖	常夏	正井	和行	第五十三帖	手習	中路	融人
第二十七帖	篝火	上村	淳之	第五十四帖	夢浮橋	大野	俶嵩

『源氏物語』あらすじ

第二十五帖「螢」　上村松篁

どの帝の御代であったか、帝の寵愛を受けた更衣が、美しい皇子(＝光源氏)を産んだ。更衣は第一皇子の母・弘徽殿女御らの迫害による心労から亡くなる。皇子は臣籍にくだって源氏となり、12歳で元服し葵上と結婚するが、母に生き写しといわれる父帝の后・藤壺に思いを寄せる。【桐壺】親友・頭中将らとの女性談義で中流階級の女性に関心を持った源氏は、伊予介の妻・空蝉と一夜を過ごすが、自分の境遇を知る空蝉は、源氏を慕いつつも二度と会うまいとする。【帚木】源氏は再び空蝉の寝所に忍び込むが、逃げられる。残された小袿を持ち帰り、空蝉を想う源氏であった。【空蝉】また六条へ通っていた頃、源氏は夕顔と出会う。しかし二人で某院へ赴いたある晩、物怪が現れ夕顔は取り殺される。夕顔はかつて頭中将の愛人であった。【夕顔】加持を受けに行った北山で、源氏は藤壺の面影を宿す少女・若紫(＝後の紫の上)を見つける。帰京後藤壺と逢瀬を過ごし、藤壺は懐妊する。その後源氏は、若紫を強引に自邸の二条院へ連れてくる。【若紫】夕顔を忘れられない源氏は、故常陸宮の姫君・末摘花と契りを交わすが、長く垂れた赤い鼻を持つ姫であった。【末摘花】紅葉の頃、帝の御前での試楽で、源氏は頭中将と青海波を舞う。翌年藤壺は皇子(＝後の冷泉帝)を産み、二人はその罪に苦しむ。藤壺は中宮となり、源氏は宰相になる。【紅葉賀】宮中で桜の宴が催され、酔った源氏は弘徽殿の細殿に忍び入り、素性の知れぬ娘と一夜を過ごす。娘は東宮(＝後の朱雀帝)に入内する予定の右大臣家の姫君・朧月夜であった。【花宴】朱雀帝が即位し、源氏は右大将となった。藤壺の産んだ皇子が東宮となり、源氏が後見を務める。葵上は六条御息所の生霊に苦しみ、男児(＝後の夕霧)を産むと急逝する。喪が明けると、源氏は若紫と新枕を交わした。【葵】六条御息所は、斎宮となった娘と伊勢へ下った。その後父・桐壺院が崩御し、一周忌後に藤壺も出家する。翌年源氏は、尚侍となった朧月夜との密会を発見される。【賢木】橘の香るある日、源氏は桐壺院の女御であった麗景殿女御と、かつて契りを交わしたその妹君・花散里の屋敷を訪ね、桐壺院をしのんだ。【花散里】右大臣・弘徽殿方に圧力をかけられた源氏は、自ら須磨へ退去する。翌年、禊(みそぎ)を行っていると急な暴風雨に遭い、奇怪な夢に脅かされる。【須磨】その後桐壺院が夢に現れ、須磨を去るようにと告げる。数日後、住吉の神のお告げを受けた明石の入道が訪れ、源氏は明石へ移り、娘の明石の君と契りを交わす。明石の君は懐妊するが、源氏は彼女を残し、3年ぶりに帰京する。【明石】冷泉帝の御世となり、内大臣となった源氏が住吉大社に参詣した頃、女児を出産した明石の君も参詣しており、源氏と自分の身分差を痛感する。【澪標】源氏が須磨をさすらい、また帰京した後も末摘花の姫は忘れられていた。ある日源氏は末摘花邸を訪れ、源氏を待ち続けた末摘花に感動し、今後の庇護を約束する。【蓬生】東国へ下っていた空蝉は、京へ戻ってくる際に石山詣の源氏と逢坂の関で行き会う。夫が亡くなると、空蝉は尼となった。【関屋】六条御息所の遺児・前斎宮は、冷泉帝に入内し、梅壺女御となった。権中納言(＝かつての頭中将)の娘・弘徽殿女御と帝の寵愛を争って華麗な絵合を行い、梅壺方が勝利する。【絵合】身分を考え上京に応じなかった明石の君が大堰に移り住み、源氏と再会する。源氏は3歳となった姫を引き

取ることを考える。【松風】源氏の意向により、姫は紫の上の養女として引き取られる。翌年藤壺が逝去し、冷泉帝は加持の僧から出生の秘密を知らされる。【薄雲】源氏は斎院を退いた朝顔の姫君に思いを伝えるが、姫は取り合わない。源氏が紫の上に女性評を語った夜、夢に藤壺が現れ恨み言を述べた。【朝顔】夕霧が12歳で元服し、大学に入学する。梅壺女御が立后し、源氏は太政大臣となる。夕霧は内大臣(=かつての頭中将)の娘・雲居雁と相愛になるが、内大臣に引き裂かれる。2年後春夏秋冬の4つの町を持った六条院が完成する。【乙女】夕顔と頭中将の遺児・玉鬘は、筑紫で美しく成長していた。地元の有力者の求婚から逃れて上京し、初瀬に参詣した際、夕顔の侍女であった右近に会い、六条院夏の町に迎えられる。【玉鬘】新年の六条院の中でも、とりわけ春の御殿は美しく、この世の極楽のようであった。源氏は女君たちを訪ねた。【初音】春の御殿で船楽の遊びが催され、翌日は秋好中宮(=梅壺中宮)による御読経が行われた。源氏の養女となった玉鬘に想いを寄せる男君は数多く、源氏自身も思いを募らせる。【胡蝶】源氏は、弟の兵部卿宮が玉鬘に熱心なのを見て、ある日宮を玉鬘の所へ招く。二人が対面すると突然蛍を放ち、蛍火に映った玉鬘の姿を見せて魅了させた。【蛍】内大臣は落胤の娘(=近江の君)を引き取るが、その処置に苦慮する。源氏も玉鬘の処遇について悩んでいた。【常夏】源氏は庭前の篝火に託し恋情の思いを伝える。玉鬘は戸惑うが、その庇護を有難く思い、打ち解けるようになる。【篝火】激しい野分が吹いたある日、夕霧は紫の上を垣間見、ほのかな恋心を寄せる。また源氏と玉鬘の親密な様子も垣間見、衝撃を受ける。【野分】冷泉帝の行幸の際、玉鬘は冷泉帝の美しさに惹かれる。源氏は玉鬘を尚待にすることを決め、裳着の時に実父・内大臣と対面させる。【行幸】玉鬘は、帝の寵愛を争う不安や源氏の思いなど悩みが尽きない。求婚者たちや夕霧は、争って玉鬘への思いを伝えた。【藤袴】玉鬘を手に入れたのは、実直な髭黒の大将だった。大将の北の方は嘆き、娘の真木柱の姫君らを連れて父邸に去ってしまう。玉鬘も参内後髭黒邸に移された。【真木柱】明石の姫君の裳着・東宮入内の為に、源氏はゆかりの女君たちに香の調合を頼み、梅が咲く頃、六条院で薫物合わせが催された。姫君の裳着では、秋好中宮が腰結役となった。【梅枝】夕霧は内大臣家の藤の宴で雲居雁との恋を実らせ、また明石の姫君も入内し、母・明石の君が後見役となった。源氏は准太上天皇となる。【藤裏葉】

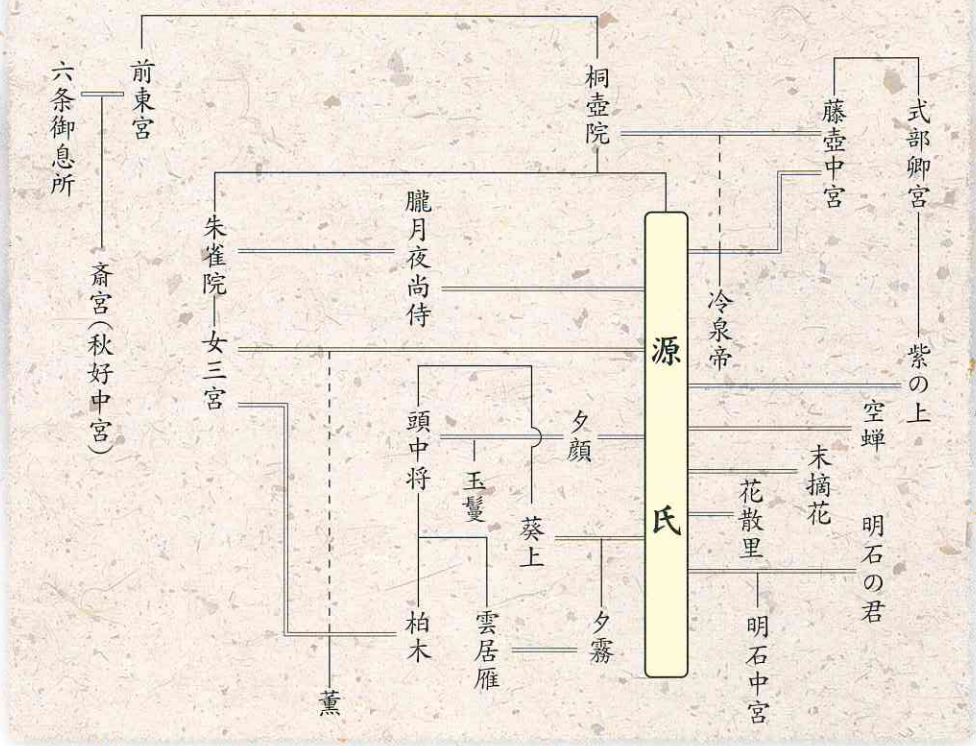
病の朱雀院は娘・女三の宮の将来を案じ、40歳になった源氏に降嫁させるが、源氏はその幼さに失望する。明石女御が皇子を出産し、明石一族の宿願が成就された。六条院で若者たちが蹴鞠をしていた際、太政大臣(=かつての頭中将)の長男・柏木が女三の宮の姿を垣間見る。【若菜(上)】柏木は女三の宮への想いを募らせる。そのような中、冷泉帝が譲位、今上帝が即位し、明石女御の皇子が東宮となる。正月に六条院で女楽が開かれるが、翌日紫の上が倒れ二条院へ移る。その隙に柏木は女三の宮との逢瀬を遂げ、宮は懐妊する。しかし源氏に密通が知られ、罪の重さから柏木は病に伏す。【若菜(下)】女三の宮は男児(=薫)を出産するが、源氏の苦渋に耐えられず、出家してしまう。柏木も重体となり、夕霧に妻・落葉の宮のことを頼んで逝去する。【柏木】夕霧は落葉の宮を訪ね、柏木遺愛の横笛を贈られる。すると柏木が夢に現れ、笛を伝えたい者がいると語る。源氏はその笛を預かることにした。【横笛】蓮の花咲く頃、女三の宮の持つ仏像の開眼供養が営まれた。秋、源氏は女三の宮の庭に鈴虫を放ち、鈴虫に託して宮への執心を口にし、宮を困惑させた。【鈴虫】小野へ移った落葉の宮を訪ねた夕霧は、胸の内を打ち明けるが、宮は応えない。しかし宮の母は真相を知らず、つれない夕霧の態度に失望し、落胆の末亡くなる。宮は都へ戻され、夕霧と結婚する。【夕霧】病の重い紫の上は出家を願うが、源氏は認め

ない。法華経千部の供養を行うも病状は更に悪くなり、源氏や明石中宮が看取る中、紫の上は世を去る。【御法】源氏の悲しみは癒されず、追憶にふけりながら日々を過ごす。源氏は出家への思いを深め、身辺を整理すると、最後の新年を迎える支度をする。【幻】【雲隠＝巻名のみ】

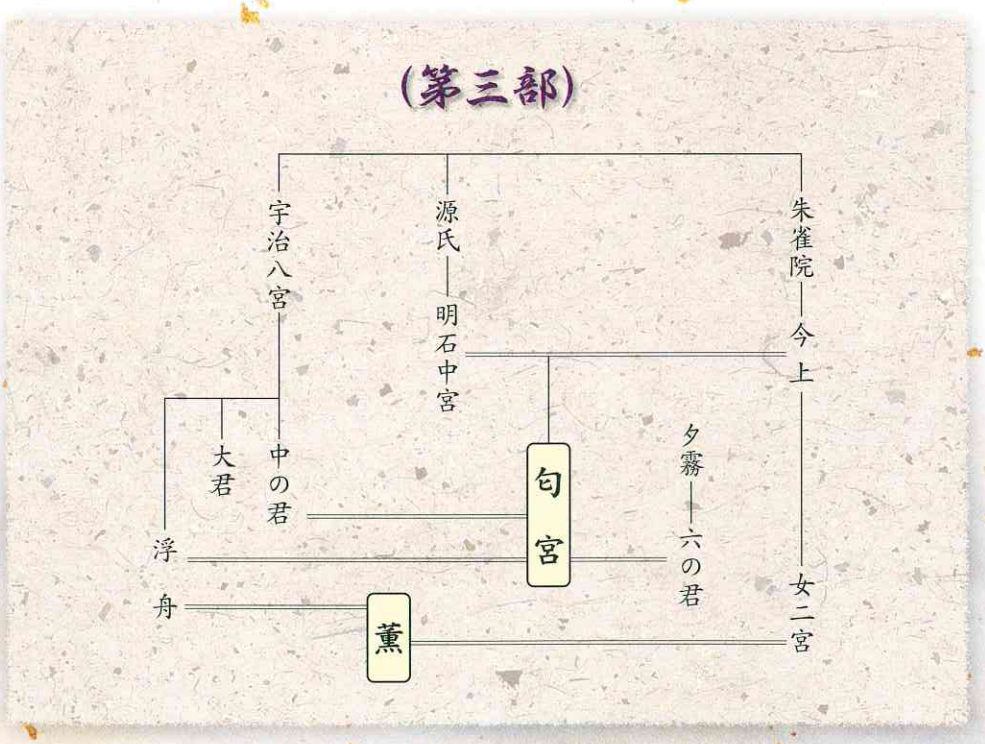
源氏の死後、世間を賑わす貴公子は、源氏の外孫・三の宮（＝匂宮）と薫だった。しかし薫は出家生活に憧れ、匂宮は生まれつき芳香のある薫に対抗し、数々の香をたしなんでいた。【匂宮】亡き柏木の弟・按察大納言は娘を匂宮に嫁がせたいと考えていたが、匂宮は大納言の後妻である真木柱の連れ子・宮の御方に惹かれていた。【紅梅】夫髭黒亡き後、玉鬘は女手一つで子供たちを養育し、二人の娘の行く末に悩むが、それぞれ冷泉院、今上帝に入内させ、求婚者たちを落胆させた。【竹河】宇治では源氏の異母弟・八の宮が、二人の娘（＝大君・中の君）を育てながら、在俗のまま仏道修行にいそしむ俗聖（ぞくひじり）として暮らしていた。薫は宮の生活に関心を持ち、宇治へ通い、偶然垣間見た大君に想いを寄せるようになる。そして八の宮に仕える弁の君から、自分の出生の秘密を聞かされる。【橋姫】薫の話から宇治の姫に関心を持った匂宮は、初瀬詣の帰りに宇治に寄り、中の君と文を交わすようになる。八の宮は薫に姫君たちのことを頼み、また姫君たちに将来のことを諌め山寺に籠るが、急逝してしまう。姫君たちは悲嘆にくれる。【椎本】薫は大君に胸の内を明かすが、大君はそれに応えず、薫と中の君の結婚を考える。薫は大君の思惑をそらすように匂宮を中の君の元へ導く。大君は、匂宮がなかなか宇治に通えないことや、匂宮の縁談、八の宮が成仏できずにいる話を聞き病に伏し、薫に看取られ息を引き取る。【總角】姉を亡くし中の君の悲しみは癒えないが、匂宮の二条院へ迎えられることになる。【早蕨】匂宮は夕霧の六の君を妻とし、懐妊した中の君は嘆く。大君を忘れられない薫は、中の君に同情し恋情を募らせるが、中の君から大君に似た異母妹（＝浮舟）の話を聞く。その後薫は帝の女二の宮と結婚し、中の君は男児を産む。薫は宇治で浮舟を垣間見る。【宿木】婚約を破棄され失意の浮舟は、中の君に預けられるが、匂宮に言い寄られ、やむなく三条に移る。しかし薫は浮舟を連れ出し、宇治へ移す。【東屋】匂宮は、浮舟が宇治で薫に囲われていると知ると、宇治へ赴き、強引に浮舟と契りを交わす。浮舟も匂宮に惹かれるが、薫に匂宮との関係が知れたことを悩み、入水しようとする。【浮舟】浮舟の書置から、侍女たちは浮舟が入水したものと思い、亡骸がないまま葬儀を行う。薫は浮舟を宇治に放置したことを後悔し、匂宮は病に伏す。【蜻蛉】浮舟は宇治川のほとりで横川の僧都に助けられ、僧都の妹尼たちに介抱される。小野に移った浮舟は出家する。翌年、薫は浮舟が生きていることを知る。【手習】薫は浮舟の弟・小君を小野に遣わすが、浮舟は対面も文も拒んだ。それを聞いた薫は、浮舟が誰かに囲われているのかと疑うのであった。【夢浮橋】

『主要人物系図』

(第一部・第二部)



(第三部)



親族関係
婚姻関係

「源氏物語絵巻」について

『源氏物語』の絵画化は原作の成立と平行して行われたと考えられています。以後、各時代に「源氏絵」として絵巻を初めとして、冊子絵・画帖・扇面画・色紙絵・屏風絵など様々な形式で制作が成されてきました。また、工芸品の装飾意匠にも使われ、長い間日本絵画における古典的な主題として大切にされてきました。

第三十四帖「若菜(上)」　岩澤重夫

「源氏物語絵巻」というと、多くの方々は現存する最古の遺品である徳川黎明会と五島美術館に収蔵されている美しい絵巻を思い浮かべることでしょう。この絵巻の成立は、原作が著されてから百数十年後の12世紀前半と考えられています。

第五十一帖「浮舟」　秋野不矩

墨書きの下図に、微妙な修正を加えながら彩色を施す「作り絵」という手法で描かれ、一場面を一紙におさめ、画面のすべてが美しい色彩で塗られた色彩本位の静かな画境のこの絵巻は、登場人物たちの「引目鈎鼻(ひきめかぎはな)」の顔の表現と、斜め上から覗き込んだような建物内部の構図が最大の特徴です。前者は、小さな赤い点だけの「口」の表現とも相まって、たいへん類型化されたように見えますが、ただの線にしか見えない「目」の表現にも嫉妬や苦しみなど、その人の内面がするどく描き出され、登場人物の性格やその場面における感情までもが描き分けられているのです。

また後者は、絵巻の描かれた場のほとんどが屋内のため、建物の屋根や天井を取り去った「吹抜屋台(ふきぬけやたい)」と呼ばれる特殊な構図法で描かれています。縦横斜めに交錯する柱や、調度品の中に登場人物が的確に配置され、登場人物の微妙な感情表現までも描ききられています。「源氏物語絵巻」は、とぎすまされた感性による絵画と書の美しさにより、原作の雰囲気を最もよく伝えている作品です。

千年の時を超えて、21世紀に生きる私たちも『源氏物語』の世界観を身近に感じることができるのは、「源氏物語絵巻」によるところが大きく、未来に永久に残すべき日本の誇る美術作品です。

香の歴史

第四十三帖「紅梅」　土手朋英

香は、仏教と共に日本に伝えられたといわれています。仏教は、538年に百済（くだら）から伝えられました。花を飾り、燈明をともし、香を焚いて仏前を清めるという儀礼の小道具の一つだったと考えると自然でしょう。『日本書紀』によると、推古天皇３年（595年）に、淡路島に初めて香木が漂着したと記されています。

奈良時代後半、鑑真和上が香の配合技術を日本に伝えると、香は仏教の道具としてだけではなく、貴族たちが自らの生活の中で楽しむものになっていきました。これを、仏のために焚く「供香（そなえこう）」と区別し、「空薫（そらだき）」と呼びます。平安時代になると、種々の香料を複雑に調合し蜂蜜などで丸薬状に練り合わせた「薫物（たきもの）」を、住居や衣服にたきしめるのが貴族たちの嗜（たしな）みとなりました。薫物は更に発展し、和歌と結びついて文学的世界を作り、「薫物合（たきものあわせ）」という知的で優雅な遊戯として定着しました。

鎌倉時代になると、政治の中心が優雅な貴族たちの世界から屈強な武士たちの世界へと移っていきます。武士の時代にも大陸との交流は続きますが、〈大陸の文化を受け入れ、学ぶ〉貴族たちの姿勢とは異なり、〈自分たちの好みに合ったものを取り寄せる〉ようになりました。また、栄西によってもたらされた禅宗の影響もあり、優雅な薫物より一木の沈香をたくことに高い価値や禅の精神性を見出しました。室町時代になると、名香木を一度にたいてしまう婆娑羅（ばさら）な新しい価値観も生まれました。何種類かの香をたきその違いを楽しむようにもなり、その異同を当てる競技として発展したのが「組香（くみこう）」です。香を聞くための形式なども整えられ、香は芸道として発展していきます。

江戸時代には、貴族や武士階級だけでなく、経済力を持った町人にも香が広がりました。人々は袖香炉や香枕など、日常の身嗜（みだしな）みのために、色々な工夫をしました。また、香を鑑賞するための作法が整えられ、それまで遊戯であった香が「道」として確立されました。さらに複雑な組香も考え出され、遊戯性の高い香道具も生まれました。

明治時代に入ると、時代が大きく変化し、政治・文化を問わず西洋化へ向かいます。香だけではなく、日本の多くの文化はこの時期に大きく衰退してしまいます。しかし、明治20年ごろになると、欧米人の日本文化の発見と共に、自国の文化を見直す動きが高まりました。茶や香はここで改めて「芸道」として見直され、大成します。

現代の日本では、第2次世界大戦や高度経済成長期を経験し、お金だけでは得られない、本物の豊かさを追求するようになりました。香も暮らしに密着し、私たちの感性や暮らしを豊かにしてくれる文化の一つとして見直されています。

『源氏物語』と香り

…あやしくてさぐり寄りたるにぞ、いみじく匂ひ満ちて、顔にもくゆりかかる心地するに思ひよりぬ。
（第二帖「帚木」より）

変だと思って手探りで近寄ると、衣にたきしめた香りがたいそう良く匂って、 顔にまでただよいかかってくるようなので、さては源氏の君か…と気づいたのでした。

伊予介の妻である空蝉は、方違え(注1.)に来た若き日の光源氏に思いがけず情をかけられてしまいます。上の文は、闇の中で、源氏が空蝉を抱きかかえた時、空蝉の女房が源氏だと気付くシーンです。

このように、身分の高さや、時にどこの誰であるのかまでが、その人の「香り」でわかってしまうのです。

『源氏物語』の時代は、宮廷、貴族社会の中において「薫香」が充実し発達した時代でした。これは、「薫物」とよばれ、後の世に盛んになる香道の聞香のように、小さく切った香木をくゆらすもので香木や香料を調合して作られる「練香」といわれるものです。練香は「火取母」という用具で適度な熱でたかれ、室内や衣類にもたきしめました。これを「空薫物」といいます。

『源氏物語』の「梅枝」の巻では、明石の姫君の裳着の儀式の準備のため、源氏の依頼で、六条院の女性達が薫物の調合を行う場面が出てきます。このように、平安時代のお香は、さまざまの香原料を独自の配合をしたもので、貴族社会ではその家の配合表は大切に伝えられるべき家伝のひとつでした。平安貴族たちは、貴重な香料を駆使して自分の感性を織り交ぜながら、薫物を楽しんでいました。

この他にも、四季それぞれのイメージを表現した「六種の薫物」、今の「匂い袋」に近いものと考えられている「えび香」などといった名称が出てきます。また、平安文学には「追風」という言葉がよく登場しますが、これは薫物をした人のあとを香りが追いかけるようにたなびく様を表現しています。

『源氏物語』が単なる恋愛長編小説でない大きな理由は、その小説としての完成度の高さもさることながら、物語全編にそこはかとなく漂う成熟した文化の香りがいつの時代の読者も魅了してきたからではないでしょうか。そして、その文化の香りこそ、紫式部が意識をして描いてきた「香り」の表現に裏打ちされ、『源氏物語』だけが持つ他の古典文学にはない魅力を醸し出しているように思えます。

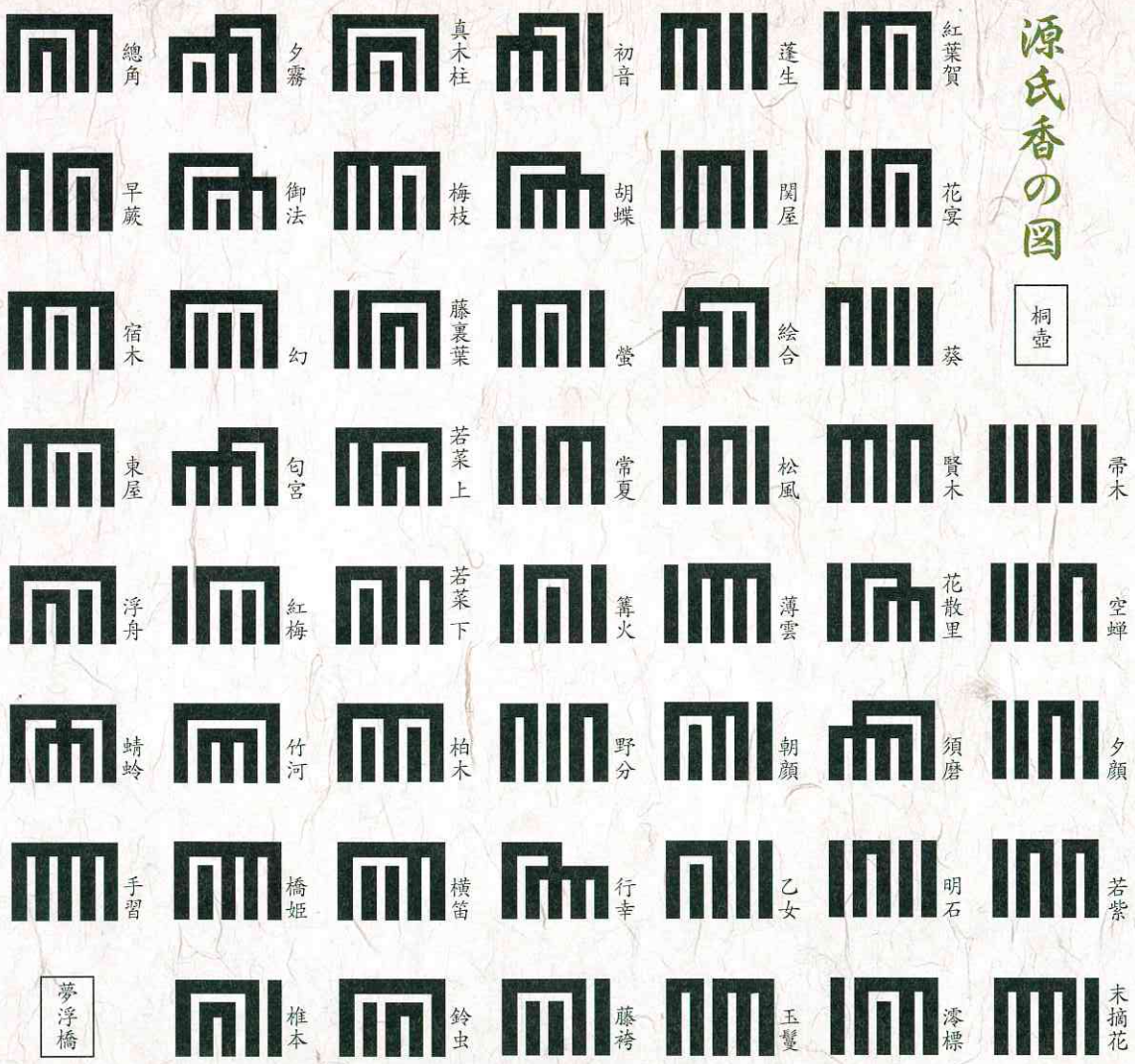
(注１.)方違え…出かける方向が占いの結果災いがあると出た時、災いを避けるため、自宅から一旦別の場所へ移り、方向をかえてから目的地へ向かうこと。

源氏香について

香道の中に、その楽しみ方の一つとして、「組香」があります。これはいくつかの香をたいて、その香を聞き、名前を当てる遊びです。香の組み合わせ方によって色々な種類となりますが、この組香の中でもっとも有名なのが「源氏香」です。

「源氏香」は江戸時代初期頃に考案されたといわれています。まず５種類の香をそれぞれ5包ずつ、全部で25包作ります。その中から5包を取り出したものをたき、その香りの違いを聞き分けます。香を聞き分けた人々は、５本の縦線を香りの異同にあわせて横線で組み合わせ、図を描きます。この図を【源氏香の図】と対応させ、各組み合わせについた名前で当てる、という遊び方です。

【源氏香の図】では、『源氏物語』54帖の各巻名から各図に名前がついています。ただし、５種類の香を５包ずつ作り、そこから5包取り出すと、その組み合わせ方は52通りになります。そこで、第一帖「桐壺」と第五十四帖「夢浮橋」が除かれて、52の名前が付けられています。この【源氏香の図】の図柄は、香道具や様々な調度品などに、デザインとして描かれています。



『香千載　香が語る文化史』より

参考文献

●『現代の源氏物語絵』河北倫明・細野正信 監修／日本経済新聞社／ 1991年

●『香千載　香が語る日本文化史』畑正高 監修／香老舗 松榮堂 協力／光村推古書院／ 2001年

●『王朝の香り　現代の源氏物語絵とエッセイ』香老舗 松榮堂広報室 編著／青幻舎／ 2002年

●『潤一郎新譯　源氏物語』谷崎潤一郎 訳／中央公論社／ 1951年～1953年

●『日本古典文学大系　源氏物語』／岩波書店／ 1958年～1963年

●『資料　日本文学史　上代 中古編　改訂版』山崎正之・針原孝之・神作光一・雨海博洋 著／おうふう／ 1976年

●『新潮日本古典集成　源氏物語』／新潮社／ 1976年～1985年

●『源氏物語必携』秋山虔 編／學燈社／ 1978年／（別冊國文學・NO.１）

●『太陽古典と絵巻シリーズⅠ　王朝物語』／平凡社／ 1979年

●『あさきゆめみし　源氏物語』大和和紀／講談社／ 1980年～1993年／（講談社コミックス）

●『源氏物語五十四帖』清水好子 著／平凡社／ 1982年

●『古典文学大辞典』／岩波書店／ 1983年～1985年

●『王朝の貴族／特選日本の歴史　ロマンヒストリー３』／世界文化社／ 1984年

●『日本の絵巻Ⅰ　源氏物語絵巻　寝覚物語絵巻』／中央公論社／ 1987年

●『源氏物語講座　第七巻／美の世界・雅の継承』今井卓爾・鬼束隆昭・後藤祥子・中野幸一 編／勉誠社／ 1992年

●『源氏の薫り』尾崎左永子 著／朝日新聞社／ 1992年／（朝日選書）

●『美術名鑑【1992版】』／美術公論社／ 1992年

●『新日本古典文学大系　源氏物語』／岩波書店／ 1993年～1999年

●『源氏物語を歩く』杉田博明 著・京都新聞社編／光風社出版／ 1994年

●『美術年鑑【平成８年版】』／美術年鑑社／ 1996年

●『新編 日本史図表』坂本賞三・福田豊彦 監修／第一学習社／ 1997年

●『源氏物語を知る事典』西沢正史 編／東京堂出版／ 1998年

●図録「源氏おんな物語展」／京都文化博物館・日本経済新聞社／ 1998年

●宝塚歌劇団花組東京公演プログラム「あさきゆめみし／ザ･ビューティーズ！」／阪急電鉄株式会社歌劇事業部／ 2000年

●『今だからわかる源氏物語』／宝島社／ 2003年

●『香三才－香と日本人のものがたり－』畑正高 著／東京書籍株式会社／ 2004年

●『源氏物語の世界』日向一雅 著／岩波書店／ 2004年／（岩波新書）

●『NHK趣味悠々 香りを楽しもう』／日本放送協会／ 2004年

●香老舗　松榮堂　http://www.shoyeido.co.jp/

●風俗博物館　http://www.iz2.or.jp/

●All　About［日本画］　http://allabout.co.jp/entertainment/japanesepaint/

●日展（日本美術展覧会）　http://www.nitten.or.jp/

《ご協力いただいた方々》

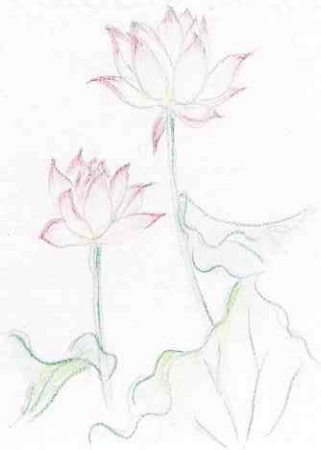
本企画展の開催およびパンフレットの作成にあたり、次の方々や機関にご協力を賜りました。心よりお礼を申し上げます。（五十音順、敬称略）

香老舗 松榮堂

うるおいきもの文化普及会
狭山語りの会
狭山香道倶楽部
狭山市茶道連盟
東京家政大学博物館
東洋大学エクステンション部エクステンション課
株式会社富士通ソーシアルサイエンスラボラトリ
朗読グループ　あうん
朗読研究狭山会
朗読サークル　くもの糸

大谷　武志
大畑　恵
蒲池　真純（書）
川口　芳子
黒須　秋桜
髙橋　愛（挿絵）
原　　久江（ポスターデザイン）

狭山市立博物館ボランティアの皆さん
六三四堂印刷株式会社



第五帖「若紫」　小松　均